

サー・ウィリアム・ペティの生涯

松川 七郎

まえがき

この小稿の目的は、サー・ウィリアム・ペティ (Sir William Petty 1623—87) の人生行路のなかから、かれの経済學的・統計學的研究方法と考えられるものが、どのようにして形成されていったか、を考究することである。なんらかの人の思想が、その人の生涯や時代から切りはなしては考察しえない、ということは言うまでもなかろう。そしてこのことは、社會科學の黎明期の端初をなすと言われている 17 世紀に生きた人々については、とくに強調されねばならないであろう。というのは、この時代には社會科學の學問的諸體系がすでに存在していたのではなく、當時の人々は、社會的な必要に應じ、みずからの生活體驗を通じて著作し、後代の學問的諸體系の先驅的な軌道を敷設したからである。

太平洋戦争の敗戦後、私は、自分の研究生活を根本的に反省する機会をあたえられ、それを機縁としてペティの著作に接したのである。私は、かれの著作の一つを翻譯したのであるが、17 世紀の英語の困難さはもとより、當時の諸事情や、かれの生涯を知らなければ、翻譯自體も容易ではない、ということは今さらながら感じ、多少ともかれの生涯についての理解を深める努力を拂った。このようにしているうちに、資本主義社會の胎動期と言われている 17 世紀のイングランドに生き、當時の社會經濟問題を解こうとしたさいに、かれが創造した研究方法は、現實問題に関心をもちながら、眞に納得のゆく研究方法をもとうと努力している私にとって、もはや他人事ならぬ重大問題になったのである。しかし、かれの研究方法を、かれの生涯や時代との関連において見きわめる、ということ自體きわめて困難な仕事であって、かれの主著すら十分に読んでいない私は、いたるところに動かしがたいような障壁の存在を意識せざるをえなかった。そこで私は、一步でも前進するために、現在までに學びえたところを一應整理してこの小稿にしたのである。

ペティの生涯をとりあつかった書物のうち、私が知りえた主要なものはつぎの 9 冊である。

- (1) Aubrey, J.: *Sir William Petty*, in "Aubrey's Brief Lives, ed. by O. L. Dick. London, 1950. pp. cxiv, 408." pp. 237—241.
- (2) Bevan, W. L.: *Sir William Petty; A Study in English Economic Literature*, in "Publications of the American Economic Association, vol. ix, no. 4. London, 1894." pp. 102.
- (3) [Evelyn, J.: *Memoirs... of John Evelyn... Ed. by W. Bray. 2 vols. London, 1818.*]
- (4) Fitzmaurice, Lord E.: *The Life of Sir William Petty, 1623—1687, chiefly derived from private documents hitherto unpublished. London, 1895. pp. ix, 335.*
- (5) Fitzmaurice, Lord E.: *Petty, Sir William (1623—1687)*, in "Dictionary of National Biography, London, 1909." vol. xv. pp. 999—1005.
- (6) Hull, C. H.: *Petty's Life*, in "The Economic Writings of Sir William Petty. ed. by C. H. Hull. Cambridge, 1899. 2 vols. pp. xci, 700." vol. I. pp. xiii—xxxiii.
- (7) Lansdowne, Marquis of: *Biographical Calendar [of Sir William Petty,] in "Petty Papers; some unpublished writings of Sir William Petty, ed. from the Bowood Papers by the Marquis of Lansdowne. London, 1927. 2 vols. pp. xlii, 276, xii, 309." vol. I. pp. xl—xlii.*
- (8) Pepys, S.: *The Diary of Samuel Pepys, with an introduction and notes by G. Gregory Smith. London, 1920. pp. xxxi, 800.*
- (9) Petty, W.: *Will [dated 2 May 1685,] in "Tracts; chiefly relating to Ireland... By the late Sir William Petty. To which is prefixed His Last Will. Dublin, 1679, pp. xxiv, 488." pp. iii—xiii.*

このうち、(9)は(4)の付録としてリプリントされているが、ペティの短かい自傳的遺言で、遺産の分配

に関する記述がかなりの部分を占めている。ペティ自身の筆で書かれたものである点で、また晩年のペティの思想があらわれている点で独自の価値を主張しうるものであろう。ジョン・オーブリ(1626—97)、ジョン・イーザリン(1620—1706)、サミュエル・ペピス(1633—1703)は、いずれもペティの同時代者であるばかりでなく親しい友人でもあった。オーブリは好古家(Antiquary)として、他の二人はダイアリスト(Diarist)として一般に特徴づけられているが、オーブリの *Brief Lives* は1950年、O. L. Dick の編集によって新たに出版された。この書物には、主としてオーブリの同時代者134人(多くはイギリス人)の短かい傳記が収められ、巻頭には94ページにわたって、編集者が「オーブリの生涯と時代」を書いている。ペティについての部分は、わずかに5ページであるが、鋭い観察にもとづいていきいきと描寫されている。ペティの人となりや風格を知るうえに欠くことのできない資料であろう¹⁾。二人のダイアリストの書物のうち、私はイーザリンの書物を手にしたことがない。しかし、おそらくはペピスのそれと同じような、日記ないしは覚え書きであろう。上記の書物に収められているペピスの日記は、1659—1669年のもので、直接ペティに関する記述も多く、当時の社会的諸事情を知るためにも貴重な資料であろう。

フィツモーリスの書物は、獨立したペティ傳として唯一のものであろう。著者はペティの子孫であるが、ボウウッド(Bowood)にあるペティの手稿や、ペティの私信を主な資料としてこれを編んだのである。ハル(C. H. Hull)によれば、この書物はもっとも權威あるペティ傳である。*Dictionary of National Biography* のペティ傳も、同じフィツモーリスが執筆したものであって、非常によくまとめられている。ペヴァンの書物は、ペティの學說に関する研究が主であるが、巻頭にペティの *Will*、オーブリの *Letters of Eminent Persons*. London, 1813. vol. II. pp. 481—491. にあるペティの生涯が抄録され、これに綿密な註が記されている。この書物は、フィツモーリスやハル以前のオリジナルなペティ研究書として價値多きものと思われる。

ハルの *Petty's Life*²⁾ は、ハルの編集にかかるペティの經濟論文集の第1巻巻頭に付されているものである。わずか20ページの小傳であるが、オーブリをはじめ非常

に多くの原資料を客觀的に吟味して述べられている。また、この經濟論文集の本文にハルが加えた脚註にも、ペティの傳記資料がかなりある。ハルのペティ傳は、ある意味でフィツモーリスのそれをぬきんでたものと言えるかも知れない。最後に、ランズダウンの *Biographical Calender* は、ペティの未刊論文集の第1巻巻頭に、イーザリンの1675年3月22日づけの日記から引用された簡単なペティ傳とともに、かかげられているものである。ランズダウンはペティの子孫である。

以上のほか、ハルの *Petty's Life* には、ペティの傳記資料が記されている。また、Müller, W.: *Sir William Petty als politischer Arithmetiker. Eine soziologisch-statistische Studie*. Gelnhausen, 1932. ss. 159. および Pasquier, M.: *Sir William Petty, ses idées économiques*. Paris, 1903. pp. 278. も、簡単にペティの生涯について記されている。邦文のペティ傳としては、獨立したものがないが、大内兵衛譯「ペッティー 政治算術」(「統計學古典選集」第4巻1941年)の巻頭に、譯者の筆になる「ペッティーの生涯と業績」がある。

以下に述べるペティの生涯のなかで、私がとりあつかった諸々の事實は、とくに本文や註に記されていないかぎり、フィツモーリスおよびハルの上記の諸著作によつた、ということをお断わりしておく。

I 少年時代(1623—40年)

ウィリアム・ペティは、1623年5月26日、南西イングランドのハムプシア(Hampshire)にあるラムゼー³⁾(Rumsey or Romsey)という町の父の家で生れた。父のアントニ⁴⁾(Antony or Anthony Petty 1587—1644)は、この町のまじしい羊毛織元(Clothier)で、その妻フランシスカ(Francisca)とのあいだに生れた第三子がウィリアムであった。1623年と言えば、イングランドでは、ステュアート(Stuart)王朝初代の國王ジェイムズ1世(James I.)の死の2年まえで、財政問題や宗教問題を通じ、國王對議會のあつれきがしだいに熱してゆく頃である。

ウィリアムは、ひにくでひょうきんな・非常に早熟な少年で、ラムゼーの學校にかよつたが、最大の楽しみは

1) E. H. ノーマン(中野好夫、平井正穂共譯)「近代傳記文學の先驅者」(「思想」1950年10月號、57—75ページ)は、オーブリのこの書物の紹介である。

2) 藤本幸太郎「ペチーとグロントの生涯」(「統計學雜誌」1937年11月號、1938年2月號)はこの抄譯である。

3) ラムゼーは、テスト(Test)川にそつた町で、サザムプトンの西北、約15キロにある。當時は羊毛業地として知られ、各種の工匠がいた。

4) アントニ・ペティはまじしい羊毛織元であったというだけでその他のことはわからない。オーブリによれば「自分の着物も染めた」というから、染色業をも営んでいたのかも知れない。Fitzmaurice: *Life*. p. 1.

町の工匠たち、たとえばかじ職・時計師・大工・さしもの師等々の仕事を見ていることであった。そして12の年には、そのどれかで働こうと思えば働けたという。またこの年、かれは、ラテン語のなまかぢりができ、15歳頃には、ラテン語はもちろん、ギリシャ語・数学・應用幾何学・天文学・航海術をわがものとしていた。

ウィリアムは、1636年(13歳)のとき、「ポケットに6ペンスいれて」⁵⁾ 船乗りになり「イングランドの商船のケビン・ボーイとして10カ月ほど働らいたのち、1637年の3月頃、ひどい近視がもとで足に負傷した。かれの早熟の才能をねたんでいた船員たちは、歩くこともできないウィリアムを、カエン(Caen)市に近いノルマンディ(Normandie)の海岸におきざりにしてしまったのである。

そこでウィリアムは、イングランドへ歸ろうとせずに、自分の不幸をラテン語で話して聞かせたので、カエン市にいたジェズイットの教父たちは、かれのめんどろをみたばかりでなく、ただちにかれをみずからの経営する學院の生徒にした。ここでかれは、正しい一般教養を身につけ、同時にフランス語に熟達することができた。この間かれは、フランス人に航海術や英語を教えたり、にせ寶石の行商人になったりして生計の資をえていた。そして、この學院で3年ほど學んだのち、1641年頃、かれはイングランドに歸ったのである。

II 青年(内亂)時代(1641—51年)

1 大陸遊學(1643—46年)

ペティがイングランドに歸ってからまもなく、⁶⁾ 國王對議會のあつれきは、ついに爆發して内亂(Civil War)となり、1642年10月には、エッジヒル(Edgehill)で最初の戦闘がおこなわれた。そして1643年5月から同年12月にかけて、王軍の勢力はイングランドの西部から南部へ急速にのび、ハンプシャーの北部もまた王軍の手に歸したのである⁷⁾。

ペティは、軍事的冒険に興味をもたず、また、おそらくは西イングランドの羊毛織元たちが王軍に對していただいていた敵意をうけついでいたために⁸⁾、1643年、内亂が白熱化するにおよんで、大陸にのがれ、オランダで約

2年、フランスでは1年餘をすごした。オランダにいるあいだ、かれは、ユトレヒト、ライデンおよびアムステルダム(Utrecht, Leyden, Amsterdam)で、主として醫學と數學の研究に没頭した。かれがライデン大學に入學したのは、1644年5月26日、21歳の誕生日であった。

1645年11月、ペティはオランダを去ってパリにゆき、ベル⁹⁾から紹介の手紙をもらってホップズ¹⁰⁾の知遇をえ、同時にホップズを介してパリ在住のイングランドからの亡命者¹¹⁾やフランスの知名の士と知り合い、それらの人人のサークル¹²⁾にはいったのである。そしてかれは、ホップズとともにオランダが生んだ偉大な解剖學者ヴェサリウス(A. Vesalius 1514—64)の著作を讀んだ。その著作は、おそらくヴェサリウスの名を不朽ならしめる *De Humand Corporis Fabrica*. (*On the Fabric of the Human Body*.) Basel, 1543. であろう。ヴェサリウスの *Fabrica* は、コペルニクス(N. Copernicus 1473—1543)の *De Revolutionibus Orbium Coelestium*. (*On the Revolutions of the Celestial Spheres*.) Norimberga, 1543. と同じ年に出版された書物である。*Fabrica* は、「ただに一個の科學としての近世醫學の基礎をなしているばかりではなく、近世科學の全領域における最初の決定的な大業績である。コペルニクスの著作は地球を宇宙の中心から移動せしめ、ヴェサリウスのそれは人間の肉體の眞實の構成組織をあらわにした。この兩著において、かれらは、中世以來偏愛されていたところの・大宇宙(Macrocosm)およびその

9) John Pell (1611—85) イングランドの數學者。當時オランダに亡命してアムステルダム大學の數學教授をしていた。ペティはベルに相當せわになつたらしい。Fitzmaurice: *op. cit.* pp. 7—8.

10) Thomas Hobbes (1588—1679) 當時ホップズもパリに亡命していて、光學に關する論文の準備中であつた。ハルは、ホップズがペティの政治思想にあたえた影響のうち、もっとも顯著なものは、ペティがいやしくも國富を増進せしめるに足ることであれば、政府はどのようなことをしてもよいとしている點であると記している。Petty: *Economic Writings*. p. lxii. ベヴァンはベイコンよりもホップズの方がペティにより大なる影響をおよぼしていると言っている。Bevan: *Petty*. p. 87. ペティは子どもたちのため、晩年、讀書指針のようなものを書いたが、數冊の書物のうちの一つは、ホップズの *De Cive* であつた。Bevan: *Ibid.* p. 87; Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 303.

11) 亡命者の中心人物はニューキャッスル(Marquise of Newcastle, William Cavendish 1592—1676)であつた。

12) フランスの神學者で、デカルト(R. Descartes 1596—1650)の終生の友であつたメルサンヌ(M. Merseune 1588—1648)の家がこのサークルの集會所であつた。

5) Lansdowne: *Calendar*, p. xl.

6) ペティはイングランドに歸ってから、數ヵ月間海軍(Royal Navy)にはいつていた。

7) Gardiner, S. R.: *The First Two Stuarts and The Puritan Revolution, 1603—1660*. London, 1920. p. 130.

8) Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 5.

縮圖たる人體 (Microcosm) についての理論を、未來永
ごうに打ちくだいたのである。』¹³⁾

以上の特徴づけが正しいならば、コペルニクスとなら
んで近世科學の言わば最初のページを開いたヴェサリウ
スを、パリのふん圍氣¹⁴⁾のなかでホップズとともに讀ん
だ青年ペティが、單なる解剖學以上の解剖學を體得した
であろうことは、想像に難くないであろう。オランダお
よびフランスでえた實社會の知見¹⁵⁾も大きな收獲であ
ったにちがいないが、大陸遊學の最大の收獲は、おそら
くはヴェサリウスとホップズであろう。1646年、これら
の收獲と70ポンド¹⁶⁾の金をたずさえて、かれは故郷ラ
ムゼーに歸った。イングランドでは、ちょうど第一次の
内亂がおさまった頃である。

2 ロンドンからオックスフォードへ 解剖學教授(1647—51年)

ペティは、ラムゼーに歸ってから、しばらくのあいだ父
の仕事に従事していた。同時にかれは複寫器 (Instru-
ment for Double Writing)¹⁷⁾の考案に忙しかった。そ

13) Singer, C: *The Evolution of Anatomy. A short history of anatomical and physiological discovery to Harvey.* London, 1925. pp. 122—123.

14) 當時の「パリのふん圍氣は、あいついでなされる
科學上の發見にどよめいており、人々の知的水平線は日
一日と擴大していった。この時代は、フランス史におい
てとりわけプリリアントな時代の一つであった。哲學や
科學における自由な探求は、一新教と同様に、スペイン
やイタリーから放逐され、—アルプスの北に避難所を見
いだしたのである……この時代は、哲學においてはガッ
サンディ (P. Gassendi 1592—1655) およびデカルト
の時代であり、神學においてはパスカル (B. Pascal 1623
—62) やサン・シラン (St. Cyran 1581—1643) の時代で
あり、慈善事業においてはサン・ヴァンサン・ドゥ・ポ
ール (St. Vincent de Paul 1581 or 1576—1660) の時
代であった。フランスの科學界は、ガリレイ (G. Galilei
1564—1642), ケプラー (J. Kepler 1571—1630) およ
びハーヴェイ (W. Harvey 1578—1657) の天文學・物理
學・生理學上の諸發見から、深刻な感動をうけていたの
である。」Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 6.

15) ペティがオランダやフランスでえた實社會の知
見は、後年の主著「租税および貢納論」、「政治算術」、「ア
イアランドの政治的解剖」その他のなかの・いきいきと
した敘述にあらわれている。

16) オランダやイギリスにおけるペティの生計はま
ずしいもので、「3ペンスで買ったくるみで」一週間くら
さねばならぬこともあった。しかしながら、かれはイン
グランドから大陸に亡命したときもっていた60ポンド
を、約3年間に70ポンドにしてラムゼーに歸り、弟
の學費にしたという。Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 10.

17) この器具は現在のタイプライターの原型のよう
なものであったらしい。Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 10.

して1647年3月頃、この器具を完成し、議會軍側から17
ヵ年の特許をえ、同年11月頃これを賣るためにロンド
ンにいった。結局この器具は賣れゆきがわるく、かれは、
發明家というものかどんなにみじめなものであるかを思
い知らされたのであるが¹⁸⁾、その反面、かれは、ロンドン
でボイル (Sir R. Boyle 1627—91), グラント (J. Gra-
unt 1620—74), ミルトン (J. Milton 1608—74) の友人
ハートリップ (S. Hartlib ?—1670?) と知り合いにな
り、學藝愛好家たち (Virtuosi) のサークルのメンバー
になった。このサークルは、1645年頃、ハーク (T.
Haak 1605—90) によって創立されたロンドン理學協會
(London Philosophical Society) と稱するものであ
った¹⁹⁾。かれが「サミュエル・ハートリップ氏に對する
W. P. の忠告。學識のある特殊部門の進歩のために」
(*The advice of W. P. to Mr. Samuel Hartlib. For The
Advancement of some particular Parts of Learning.*
London, 1648.)²⁰⁾ や、「諸々の交易の歴史」(History
of Trades)²¹⁾ を執筆したのは、ハートリップのすすめ
によるものであった。

1648年、ペティは、ロンドンからオックスフォードに移
住した。同市は、すでに1646年、議會軍の手に歸し、大
學も同じ手で改組され、ロンドン理學協會の主要メンバ
ーであったボイル、ウォリス (J. Wallis 1616—1703),
ウィルキンス (J. Wilkins 1614—72) などが同市にう
つっていたので、ペティもそのあとを追ったのである。
ペティは、ただちにブレイズノーズ・カレッジ (Brase-
nose College) における解剖學教授クレイトン博士 (Dr.
Clayton) の代講をおこない、1649年3月には醫學博士
となり、翌年12月には同カレッジにおける解剖學の正
教授となった。そしてこの頃かれは、同カレッジのフェ
ロー (Fellow) に選ばれ、ついで副學長となり、同時に
ロンドンのグresham・カレッジ (Gresham College)
の音樂教授をも兼任することになった。かれは、解剖學の

18) 「租税および貢納論」の第11章「獨占および官
職について」のなかで、ペティはこの點を論じている。

19) この協會および後述のオックスフォードにおける
サークルが後年の王立協會 (Royal Society) の母體と
なった。

20) ペティに對するベイコンの影響は、ハートリップ
にあてたこの教育論 (*Tractate on Education*) のなかで、
ペティが「唯一の眞實の方法は觀察および實驗という方
法である」と述べていることにあらわれている。Bevan:
op. cit., p. 86. この書名もベイコンの *Advancement of
Learning.* London, 1605. に似ている。

21) これは完成しなかった。しかしその摘要と思わ
れるものが未刊論文集に收められている。Petty: *Petty
Papers.* vol. I. pp. 203. 205—207.

正教授になった頃、わが子を殺したけん疑で、絞首刑に處せられ・州執行官から死亡を確認されたグリーン (A. Green) という婦人をそ生させ、それによって大いに名聲を博した。

以上のような大學正教授としての活動とならんで、ペティは「見えざるカレッジ」(invisible college) の活動にも参加した。これは、ロンドン理學協會のメンバーがオックスフォードに移り、そこで作られたサークルにかれら自身があたえた名稱であるが²²⁾、物理學・解剖學・幾何學・天文學・航海學・靜力學・化學・力學・磁氣學および自然實驗のごとき、理學およびそれに關連する問題が主としてここで論じられた。集會の場所には、主としてペティの宿所が當てられた。このサークルの人々は、各人の學問的志向においても、またその見解においても同一ではなかったが、本質的なものを探求するという愛によって結ばれていた、と C. H. ハルは述べている。

ペティは、青年時代の前半を大陸で、後半をロンドンとオックスフォードで主としてすごした。前半における收穫は、前述したごとくであるが、後半においてかれは「ベイヤンの呼び聲を聞いた」ばかりではなく、「それを理解し」²³⁾ かつ實行にうつした人々のなかで、大陸でえた收穫を整理し、發展せしめたのである。そしてこの青年時代の後半は、イングランドにおける第二次の内亂(1648—49)・チャールズ1世の悲劇的な死・クロムウェル (O. Cromwell 1599—1658) の勝利から共和國 (Commonwealth) への時期に相當する。かれは、この時期を圖書館・實驗室裡の人、新時代における人體 (Body Natural) の研究者、解剖學者として送ったのである。

III 最初のアイアランド滞在 (共和國時代) (1652—59 年)

1 “Down Survey” (1654—56 年)

1651 年 (28 歳) のおわり頃、ペティは共和國政府から、アイアランド派遣軍づきの軍醫に任命された²⁴⁾。突

22) ロンドン理學協會の人々 (そのうちのある人々はロンドンにとどまった) のほかに、數學者のワード (S. Ward 1617—89)、歴史家のウッド (A. A. Wood 1632—95)、醫學者のバサースト (R. Bathurst 1620—1704)、天文學者で建築家のレン (C. Wren 1632—1723) などが主たるメンバーであった。

23) Green, J. R.: *A short history of The English People*. London, 1905. p. 609.

24) ペティが、クロムウェル政府から、このような任命をうけるようになった理由は明らかではない。フィッソーリスの推測によれば、オックスフォード大學の改組後、1651 年、オリヴァ・クロムウェルは、同大學の名譽

如としておこなわれたこの任命にしたがい、翌 1652 年、かれはセント・ジョージ海峡 (St. George Channel) を渡り、9 月 10 日に、ウォーターフォード (Waterford) に上陸した。

アイアランドでは、1641 年 10 月以來、アイアランド人舊教徒 (主として地主) を中心勢力とする對イングランド人新教徒の反亂が 11 ヶ年もつづき、その間、イングランドにおける内亂とからみ合っつきわめて複雑な様相を呈していた。そして反徒がイングランドにおける王權の回復をはかるにおよんで、1649 年 8 月、クロムウェルは、アイアランドに遠征し、數ヶ月のうちに全島を徹底的に征服してしまった。ペティがウォーターフォードに上陸したのは、長年にわたる反亂が一段落し²⁵⁾、アイアランド全島が廢墟と化した直後であった²⁶⁾。かれは、ただちに軍隊の醫療施設の改善にとりかかったが、まもなく土地測量ならびに沒收地の分配、という難問の解決をみずからひきうけることとなったのである。

アイアランドの反徒の土地は、ほとんどすべて共和國政府に沒收されたが、それをどのように分配するかが大問題になっていた。というのは、すでに沒收地は、(1) 反亂鎮定のため戦った軍隊の將校・兵士 (その未拂い給與は土地で支拂われることになっていた²⁷⁾) と、(2) 派遣

總長に選ばれ、クロムウェル家の禮拜堂牧師二人を同大學の要職につけた。クロムウェルは、おそらくはこの二人から、ペティが有能な士で、その政見が私心のない人であることを知ったのであろう。Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 17—18.

25) 「アイアランドの政治的解剖」の第四章で、ペティはこの反亂の諸結果を分析している。

26) 1652 年 9 月、反亂鎮定直後、アイアランドは、その人口の 6 分の 5 を失い (死によってまたは流刑によって)、婦女子はまい日飢えてつきつぎに堀のなかで死んでいった。みなし子は、一父はスペインに流刑され、母は飢えに死んだ、一狼にくわれるばかりであった。この年とその翌年には、悪疫と飢きんが全王國をひとなめにしてしまい、その結果、20—30 マイル旅行しても生きとし生けるものを見なかった……たまたま、2, 3 軒の小舎に出會うと、そこには老人夫婦と子どもがしょんぼりと飢死を待つていた。かれらは墓穴から死體を掘りだしてたべさえたという。Prendergast, J. P.: *Cromwellian Settlement of Ireland*. London, 1870. p. 79. quot. in O'Brien, G.: *The Economic History of Ireland in the Seventeenth Century*. Dublin and London, 1919. p. 108. 經濟上の見地からすれば、人口の流亡が最大の損失であり、經濟的諸活動の全面的停止、とくに耕地の荒廢もまた、これに劣らず重大問題であった。O'Brien: *Ibid.*, p. 101.

27) このために給與債務證書 (Debenture) が發給された。Firth, C. H.: *Cromwell's Army*. London, 1912. p. 203.

軍の軍費を前貸ししたロンドンの投機者 (Adventurers) 一かれらはこの前貸し金を鎮定後、一定面積の没収地で償還されることになっていた²⁸⁾と、(3) その他種々雑多の・土地に対する権利主張者 (Claimants) とに分配されることになっていたからである²⁹⁾。

分配のためには、まずもって没収地の面積・境界・所有権の性質等々が明らかにされることが必要であり、ペティがウォータフォードに上陸したのは、このための測量がはじまろうとしていたときであった。そして 1653 年 8 月、ワーズリ (B. Worsley) という測量總監の指揮のもとに、「總括測量」 (“Grosse Survey”) と稱する測量が開始された。

ペティは、この測量が、ワーズリのきわめて不十分な・でたらめな管理のもとにおこなわれている、という判断をくだし、ただちに自分で、完全にちかい測量をおこなうこと、すなわち 13 ヶ月以内に測量を完成し、地圖の形に正確に書き記すことを提案した。多くの討議のち、ワーズリの測量はとりやめとなり、1654 年 12 月、ペティの提案した “Down Survey” (“測量して地圖の形に set down する”) ということから、このように名づけられた) が、かれに委任されることになり、その測量は翌年 2 月から実際に開始されたのである。

そこでペティは、40 パーチ (Perch, 1 パーチは $5\frac{1}{2}$ ヤード) を 1 インチに縮尺して、没収地・王領地・教會所有地について「幾何學的測量」をおこない、「各郡・教區・都市・農地の面積・形状・位置、ならびにそれぞれの土地の地味、都市・城・橋・教會・湖・沼澤・山・川・公道等々の位置」³⁰⁾ を測量し記録した。1656 年 3 月頃、測量は豫定どおり完了したので、かれは、政府に測量費の支出と自己の責任の解除を請願した。軍代表の委員會は、ペティの測量結果を審議したのち、1656 年 5 月、申し分なしとの判定をくだした。ペティの測量は、幾何學的に實測し、縮尺して地圖に仕あげるという科學的方法によるものであって、當時一般におこなわれ・ワーズリもまたそれにしたがった方法、すなわち土地の種別・面積・

地價等を、簡単にリストにした言わば土地臺帳の作成のごときものとは全く異なる新方法であった。ペティが作成した測量地圖は、「今日に至るまで、アイアランドでは法律上の實證力をもっている」³¹⁾とされている。測量の報酬として、かれは正味 13,000 ポンドをうけとった。かれは、この一部で土地投機をし³²⁾、かなりの土地を手にいれ、ロンドンに邸宅を買ったと伝えられている。

2 没収地の分配事業 (1656—58 年)

土地測量の完了につづいて、ペティは、没収地を將校・兵士等々に分配するための委員會のメンバー (三人) の一人に指名され、そしてこのぼう大な・しかも複雑きわまる事業の實施面をほとんど獨力で處理しなければならぬことになった。

没収地は、その地味はもとより、その形状・交通上の便不便・都市からの距離等々において種々雑多であった。他方、それらの土地の地主は、大部分シャノン (Shannon) 川の西方コンノート (Connaught) 地方に放逐されたり、死んだり、スペインその他の國々に流刑に處せられたりしたが、生き残った小作人は、そこにとどまっていた。このような自然的・社會的諸條件を異にする土地を、將校・兵士・投機者というそれぞれに立場を異にする者に分配するという事業の困難さは、11 年間もつづいた反亂のあとの混亂状態、イングランドの軍隊の將校およびロンドンの投機者たちの背徳行爲のために、いく倍にも加重され、どうすれば公平を期しうるかについてのペティの苦惱はなみなみならぬものであった。

このような利害の對立は、ペティに對する非難攻撃となつてあらわれ、クロムウェル一族のペティに對する深い信頼、當時かれがアイアランド總督ヘンリ・クロムウェル (H. Cromwell 1628—74, オリヴァの第二子) の私設秘書であったこと等³³⁾は、ペティに對する非難をして、形を變えたクロムウェル攻撃たらしめた。この非難に答え、みずからの立場を擁護するため、ペティは忙がしくダブリン (Dublin) とロンドンのあいだを往復した。

28) 1641 年 10 月の “Act of Subscription” によってこのことが規定された。「この法令にもとづき、約 300 千ポンドが拂いこまれたが、それがどのように處分されたかは、よくわからない。」 Petty: *Petty Papers*. vol. I. p. 49. この法令がチャールズ 1 世時代に制定され、共和國の時代に償還期を迎えたということが事態を一層複雑なものにした。

29) このような方策によって、イングランド人新教徒をアイアランドに送り、そこにヨーマンリ (Yeomanry) の創設が企圖されたのである。Firth: *op. cit.*, p. 205.

30) Petty: *Petty Papers*. vol. I. p. 79.

31) W. ロッシャー著「英國經濟學史論」(杉本榮一譯 1947 年) 142 ページ。ペティの測量結果は不正確であるという説もある。Butler, W. F. T.: *Confiscation in Irish History*. London, 1917. pp. 155ff.

32) 多くの將校・兵士は、給與債務證書 (Debenture—註 27 参照) を換金したので、これらの證書は二束三文の價格になった。ペティはそれを買集めて土地を手にいれたのである。Fitzmaurice: *op. cit.* p. 69.; Lansdowne: *op. cit.*, p. xli.

33) 1659 年 1—4 月、ペティはヘンリ・クロムウェルの友人というおかげで、代議士に選ばれた。

そして1657年2月には將校兵士への・1658年5月には投機者への沒收地分配事業をおわったのである。

1658年9月、護民官オリヴァ・クロムウェルが死んだ。ペティの立場は不利になるばかりで、1659年7月、レパブリカン (Republican) のサンキー (H. Sanchy? - 1685?) から、復活したランプ (Rump) 議會に、土地分配に関する收賄のかどで告發された。しかし、かれは全然審問されなかった³⁴⁾。この頃、レパブリカンの反撃は最高潮に達し、クロムウェル派に屬する者は、その地位・權勢から追われ、當然のみちゆきのようにペティもいっさいの地位を失った³⁵⁾。このような状態のまま、かれはロンドンで王政復古を迎えたのである。

以上のように、軍醫としてアイアランドに渡航したペティは、その島における7年の滞在期間を通じて、従前とは著るしく異なる立場に身をおいた。“Down Survey”をおこなうためには、かれの少・青年時代からわがものとしていた廣汎な數學的知識が、大いに役だったであろうことは疑う餘地のないところである。このことは、かれがこの測量を、とくに“A Geometricall Survey”³⁶⁾として特徴づけていたことであらわれている。

しかしながら、“Down Survey”は、自然的な存在としての土地の物理的諸性質を測定してこと足りるものではなく、測量それ自體、土地の生産性を合わせて調査する事業であったが、そのうえ、さらにこれを一定額の貨幣の對價として、種々さまざまな階層の人々のあいだに分配する、という事業の前提をなすものであった。しかもペティは、その分配事業をも主宰したのである。これらの事業を身をもって處理する過程に、かれは、否應なしにアイアランド社會という政治體 (Body Politick) を觀察し解剖したのである。これは、かれにとってはじめての大きな收穫であった。そればかりではなく、かれは、この時期に廣大な土地をみずからの手におさめ、アイアランドと切っても切れぬ關係を結ぶ機縁をつくったのである。

34) 1659年4月にも、同じ問題についてペティは議會で審問をうけて答辯したが、その直後に議會は解散され、はっきりした結末がつかなかった。

35) 公式辯明の機を失ったペティは、*A Brief of Proceedings between Sr^r Hierome Sanchy and Dr William Petty*... London, 1659; *Reflections upon some Persons and Things in Ireland*... Dublin, 1790; *History of... "The Down Survey"*. Edited... by Thomas Aiskew Larcom... Dublin, 1851. において、測量や土地分配の経緯を明らかにしようとした。

36) Petty: *Petty Papers*. vol. I. p. 79.

IV. 王 政 復 古 (1660 年)

1660年5月、チャールズ2世は、國王たることを宣し、ロンドンに歸り、ホワイトホール (Whitehall) にはいった。王政復古、すなわち新たなる社會的基盤のうえにもたらされた王權の回復は、ペティに社會的地位・學問的研究・土地資産の回復をもたらした。

共和國の末期に、ペティはいっさいの社會的地位を失った。その原因は、クロムウェル一族の深い信頼や保護があつたにもかかわらず、否それらがあつたからこそ、極端なレパブリカンの攻撃的になったからである。こうした事情が王政復古にさいしてかれの立場を有利にしたらしい³⁷⁾。かれは、チャールズ2世のおぼしめしによって、ナイト (Knight) に叙せられ (1661年)、アイアランド議會の議員に選出され (1661年)³⁸⁾、「定住法」 (Act of Settlement) の實施委員に任命され (1661年)、また同じ頃アイアランド測量總監 (Surveyor General) にも任命された。のみならず、かれは、明らかに法律を知らないのに、ダブリンにある海事裁判所 (Admiralty Court) の判事になろうとしたこともあつたらしい。しかしながら、新たにえた社會的地位—その多くはチャールズ2世の個人的好意の所産であるが—は、その後のかれの生涯に、格別の意味をもたなかったようである。

1 王立協會 (Royal Society) の創立— 「租税および貢納論」 (1662年)

すでに見たように、1640年代のおわり頃から、ペティはロンドンやオックスフォードにおける“invisible college”の熱心な學徒の一人であつた。ここに集まっていた人々は、王政復古とともにロンドンに歸り、グレシャム・カレッジの講堂でしばしば集會を開いていたのである。1660年11月28日、レンの講義を聞いたのち、一同の會話は、物理・數學的な實驗的な學識の進歩のための諸外國の研究機關のことに轉じ、この集會も、自發的に人々が集まって研究している他國の例にならうようなものたらしめたいという決議が採擇された。そしてこのサークルは、ついに1662年7月12日勅許をえて「實驗による自然的知識の改善のための王立協會 (The Royal Society for the Improvement of Natural Knowledge by Experiment) として法人化された。科學研究が近代的

37) Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 96.

38) かれはテムプル (Sir W. Temple 1628—99) とともに下院の委員會でアイアランドの交易促進のために活動した。

に組織化されたこと³⁹⁾、「観察・比較・実験による自然科学的研究方法が、その領域外の諸事項についての研究方法をも一變せしめた」⁴⁰⁾こと、これらの點で、この協會の創立は、科学研究の前進に巨大な貢獻をなしたのである。

ペティは、王立協會のもっとも積極的な創立メンバーの一人であった。この協會の創立のための活動を通じて高められたかれの學問的研究の熱意は、共和國の時代をへだてたかつての時代のそれとは異った領域、すなわち數學・醫學・解剖學から大きく轉回して社會・經濟學的領域へ、つまり、“Body Natural”の研究から“Body Politick”の研究へうつったのである⁴¹⁾。そしてこの轉回の最初の成果は、かれの主著「租税および貢納論」(*A Treatise of Taxes and Contributions*)として、王立協會の創立と同じ1662年にロンドンで出版された。

ペティがこの書物を執筆した直接の目的は、オーモンド公(Duke of Ormond)が、アイアランド總督として赴任するにさいし、みずからの知識経験にもとづく希望や忠告を書いて同公のはなむけにしよう、というのである。すなわち、アイアランドは、新付の國として秩序は不十分であり、いきおい大軍を駐屯させておかねばならず、必然に財政問題が重要になるから、租税・貢納の諸性質・標準を明らかにしようというのである。目的はきわめて實踐的である。かれは、まず巻頭に經費論を述べ、つぎに各種の公共的經費が膨脹する諸原因におよび、さらに收入論とその各論を展開している。かれによれば、經費膨脹の主因は軍事費の増大であり、收入論の中心問題は租税負擔の公平—すなわち租税の比例的(proportional)な負擔—が、どうすれば期しうるかである。そして全篇の總結論として、かれは、租税中のもっとも合理的なものは、「各人がみずからのために取得し(takth)、現實に享受する(enjoyeth)ものに應じて」の課税、すなわち消費税(Excize)である、と主張するのである。かれの論述の特色は、「租税および貢納論」の先頭に經費論をおいている點にすでにあらわれているのであるが、租税を論ずる場合にも、かれは租税をその實體たる貨幣、それを生みだす土地および労働との關連において追究し、その過程において、後代の經濟學が基本的な重要問題としたところを問題としているのである。

39) 1657年にはフローレンス(Florence)に、1666年にはパリに、1700年にはベルリンに、それぞれ科學アカデミが創立された。湯淺光朝著「科學文化史年表」(1950年)50ページ。

40) Green: *op. cit.*, p. 609.

41) 王政復古とともにペティは醫者たることをやめた。

したがって、ペティの論ずるところは、もとより單なる財政技術論ではない。そしてこの書物は、イングランドにおける「近世的形態における租税開始」の時代、と言われている1642—88年⁴²⁾において、王政復古直後、チャールズ2世によっておこなわれた税制改革の所産の一つでもあったのである。「租税および貢納論」が、かれの財政經濟政策論であると同時に、その政策の現實的基礎を論じたものとなり、かれの著作中でもっとも體系的なものと言われるようになったのもこのためであろう。

「租税および貢納論」が出版された2年後に、イングランドは、もう一つの問題を提起していた。それは、第二次オランダ戦争(Dutch War II. 1664—65年、共和國時代のオランダ戦争1652—53年を第一次とする)によって租税が加重するばかりであるが、これをどう合理的に處理するか、という問題であった。そして、この問題に對するかれの解答が「賢者には一言をもって足る」(*Verbum Sapienti*. [1664] London, 1691.)の執筆であった。この書物は、後述する「アイアランドの政治的解剖」の付録として、かれの死後1691年に出版されたものであって、ハルの複製版で約20ページほどの小冊である。かれはこの問題に對して、租税を公平に、すなわち比例的に課するにはどうすればよいか、という觀點から接近し、それにはまず租税の源泉を明らかにしなければならないとする。そしてその源泉とは、人民の數・その増減・その富・および外國交易であって、これらを確定し、比例的に課税する基礎たらしめねばならない、と言うのである。かれはこれらを計算し、結論的には關税・消費税を公平なる租税とし、それらを加重して徴收すべしとしている。かれは、「租税および貢納論」で、租税の公平を期するためには人民の數・その富・その交易について熟知せねばならぬ、という問題を提起していた(同書第2章)。その問題を、かれはここで實際に計算することによって具體的に示したのである。したがって本書は、戦時における「租税および貢納論」としてはもとより、社會經濟現象の數量的把握の最初の試みとしても、きわめて重要な意義をもつものと思われる。

すでに1662年、ペティの親友グラントの著書「死亡表に關する自然のおよび政治的諸觀察」(*Natural and Political Observations...made upon the Bills of Mortality...London, 1662.*)が出版された。この書物は、商業の繁榮にともなう人口の都市集中・悪疫の流行(1603年、

42) Dowell, S: *A history of taxation and taxes in England from earliest times to the present day*. London, 1884—85. vol. II. pp. 3—33.

1625年の大ペスト)による大規模な死亡等がひき起す諸現象を観察し、人口統計の先驅的著作となったのであるが、ペティは、この著作に協力しつつ社會現象の數量的把握に一層の關心をもつようになっていたに相違ない⁴³⁾。これは、1662年に、かれがダブリンの死亡表に関する研究に着手した(完成して出版されたのは1683年)ことにもあらわれている。

1665年には悪疫がロンドンを襲い、その翌年にはロンドンに大火があって、かれの邸宅もまた類焼した。悪疫の流行中、かれはサリ(Surrey)に引退していたが、そこでも機械の發明⁴⁴⁾に餘念がなかったと言われている。

2 二度めのアイアランド滞在— 植民事業(1666—73年)

王政復古は、アイアランドにおける土地問題を再燃させ、共和國時代に土地所有權を獲得した者は、必ずしもすべてそれを再確認されたのではなかった。しかしペティは、1660年1月2日づけのチャールズ2世の勅状によって、アイアランドにおけるみずからの所有地を確保することができ、1662年、裁判所の判決によって多少の土地を手放しはしたが、なおかれの所有地はアイアランドの各州にあった。1666年の春、かれは土地に関する裁判事件のため、アイアランドにおもむき、1673年まで滞在した。この頃のかれはケリ(Kerry)州だけでも50,000エーカーの土地を所有する大地主になっていた。

アイアランドにおける土地所有權は、きわめて不安固で、當時のアイアランド總督エスィックス伯(Earl of Essex, Arthur Capel 1631—83)が、「實を言えば、アイアランドの土地は争奪の對象であるにすぎない」と言ったほどであった。11年もつづいた反亂・共和國時代の没收・王政復古後のわずかの還付・地主の歸還等々のために、土地取得に関する手續きの不備が際限もなく發見された。このような不備を「發見し、それを聽許してもらうように比較的高い地位にいる權力者と親密なあいだがらにある人物を説得して、そのうえで、正否いずれにもせよ、すくなくとも告發者の利益になるような和解へと所有者をおとしこむ……これはアイアランドにおける主要な交易(Trade)の一つである」とペティは言う(「アイアラン

43) グラントのこの著作は、實はペティの著作であるという説もおこなわれている。この問題は論争されたが結局結末がついていない。しかし、すくなくともペティが協力したということは事實らしい。久留間鮫造譯 同邦譯書(1941年)解題354ページ以下を参照。

44) 王政復古直後、ペティは複底(Double Bottomed)船を考案建造した。キールが2枚ある大型ボートのようなこの船は、非常に快速であったという。

ドの政治的解剖」第11章)⁴⁵⁾。かれは自己の土地所有權を護るのに忙殺され、裁判所の法廷にも立ったのである。

訴訟事件が一段落すると同時に、ペティは自己の所有地のうちで最大の所有地があるケリ州のケンマァ(Kenmare)に、イングランド人の新教徒を移民して「工業植民地」(Industrial Colony)を徐々に建設していった。當時かれの一家はダブリンに居をかまえていた⁴⁶⁾。ダブリンから200マイル以上もへだたったケンマァに、かれは1年に2回づつ困難な陸路の旅をし、周到な注意を拂って植民事業の經營に當った。かれは、製鐵工場や製銅工場を建設し、それに供給すべき鑛石をアイアランドにもとめた。しかし、周圍にいるアイアランド人が新教徒の移民に對して敵意をもっていたので、移民たちは、交易を發展させはしたが、この事業の全體としての見とおしは良好ではなかった。

この事業の困難さは、土地に對する重税によって加重された。というのは、當時アイアランドの徵稅うけおい人(Farmer)が、ペティの所有地に對しても不當な重税を課したからである。租稅負擔の公平は、かれの年來の主張である。したがってかれは、その論者としても、大地主としても、この重税やこうした税制そのものに強硬に反對した。そしてかれは、1673年のおわり頃、ロンドンにゆき、一層有効に本國政府と論戰を試みようとしたが、チャールズ2世治下における腐敗した政府は、かれの意に反する方策を採用したのである。

共和國政府による新植民地アイアランドの經營という言葉一つ一つの社會的實驗に、重要な役割を演じたペティは、みずからもまた「工業植民地」の經營に着手し、小規模な社會的實驗をおこなった。この實驗を通じて、かれの“Body Politick”に関する知見は著しく廣められ、

45) ペティは、このように非難した「交易」に、みずから従事したらしい。というのはつぎの事情による。ケリ州の領主オサリヴァン(Daniel O'Sullivan)は、父祖傳來の所有地を反亂・共和國時代を通じて所有しつづけ、王政復古にさいして、その所有權を確認されていたが、ペティやその他のものが、ウォルターズ某—かれは、共和國時代にアイアランド人を海外に「流刑に處したり賣りとばしたりした」ためにクロムウェルから廣大な土地をもらうことになっていた—の權利名義を引き出してきて、オサリヴァンの所有地をわがものとしてしまった。オサリヴァンは、土地の還付を懇願したが、ついに1エーカーも回復できなかったという。Butler: *op. cit.*, pp. 192—193.

46) 1667年6月7日、ペティは、フェントン(Sir M. Fenton)の未亡人イリザベス(Elizabeth ?—1708)と結婚した。イリザベスは、ペティの友人ワラー(Sir H. Waller 1604—66?)—チャールズ1世の處刑狀の署名者の一人で、ロンドン塔で一生をおわたらしい—の娘であった。Fitzmaurice: *op. cit.*, pp. 41, 153.

そして深められたのである。しかしながら、王政復古から名譽革命への過渡的な時期を通過しつつあったイングランド政府は、かれの主張を容れたり、「実験」を成就させたりするうえに、かならずしもかれに幸いしなかったのである。

V 名譽革命以前 (1676—87 年)

1 「政治算術」・「政治的解剖」

1676年の夏、ペティは、三度アイアランドに居をかまえた。そして1685年にロンドンに歸るまでの約9年間の大部分をアイアランドで過ごした。前述のように、「Down Survey」以来のかれとアイアランドとの関係は、物心兩方面にわたって非常に緊密なものとなり、アイアランド王國の利害得失は、今やかれ自身の利害得失にまで深められた。かれと徴税うけおい人との係争は、この時期に再燃し、政府當局と結託した徴税うけおい人は、1677年2月10日に、裁判所侮辱のかどでかれを逮捕投獄した。まもなくかれは釋放されたのであるが、この年、オーモンド公が、エスリックス伯にかわってアイアランド總督に再度任命され、同公の手によって、税制問題がある程度改善され、かれの立場も小康をえるようになった。かれが「政治算術」(*Political Arithmetick*…[1676] London, 1690.) および「アイアランドの政治的解剖」(*The Political Anatomy of Ireland*, 1672. …London, 1691.) を完成したのはこの頃で、兩著とも1671—72年頃に着手され⁴⁷⁾、同じこの頃に完成されたい。

兩著作ともその執筆の目的はきわめて實踐的である。すなわち前著の目的は、チャールズ2世の治下、かつての内亂につづいて、ロンドンの大悪疫(1665年)・大火(1666年)・チャタム(Chatham)における國難(1667年)が起り、イングランドはフランス・オランダの隆盛にひきかえ、地代の低下・産業の衰退がなげかれていたが、この悲觀論に對して、それは根據なきものであること、イングランドは前途ますます有望であり、チャールズ2世はルイ14世(Louis XIV)の束縛から脱しうることを實證しようとするにあった。また、後著のそれは、17世紀を通じてイングランドの新植民地となりつつあったアイアランドを、イングランドの「平和と豊富」(Peace and Plenty)に役だたしめるにはどうすればよいか、を明らかにするにあった。

47) Fitzmaurice: *op. cit.*, pp. 157—158. ペティが最初に *Political Arithmetick* ということばを用いたのは、1672年12月17日づけの・アングルシ卿(Lord Anglesea)あての手紙のなかであったという。

兩著の執筆の目的が實踐的である點は、王政復古直後の二著作と同じである。が、この兩著においてペティは、「Body Politick」に關する研究方法と考えられるものを、はじめて明確に規定しているようである。「政治算術」の序文でかれは言う。「私が用いる方法は、現在のところ、あまりありふれたものではない。それは…*Political Arithmetick* と言わるべきものであるが、比較級や最上級のことばのみを使用したり、思辨的な議論をするかわりに、言わんとするところを數・重量・または尺度(Number, Weight, or Measure)によって表現すること、「感官にうったえうる議論のみを用い、また、自然のなかに實見しうる基礎(visible Foundation)をもつような諸原因のみを考察すること、すなわち「個々人のうつり氣・意見・このみ・感情に左右されることがらは、これを他の人々が考察するままにさせておく」ことである、と。また、「アイアランドの政治的解剖」において、かれは、全問題を「事實の探求・原因の推定・方策の案出」⁴⁸⁾という順序で處理するのであるが、經濟社會の實體を探求するために、かれは政治算術の方法を用いて1672年現在のアイアランドという政治體を解剖する。そしてこのさい、かれはベイコンの教えにしたがい、「Body Politick」と「Body Natural」のあいだに「Parallel」をおこない、「Body Politick」の「均整・構成組織・および比例」(Symmetry, Fabrick, and Proportion)を明らかならしめようとする。その用具としては「ありふれた一本のナイフと一片のぼろきれ」を手にするにすぎないと言っているが、それらは土地面積・人口・家屋數・世帯數・煙突數・かまど數・諸生産物の量・その價格等々であり、これらをもってしては、細かいことはわからぬにしても、「どのへんに肝臓とひ臓が」あるかは、十分かわるし、このような解剖をはじめておこなう自分としては、それで十分である、と言う⁴⁹⁾。このかぎりにおいて、かれの方法は、觀察・計量・比較・分析にもとづく經驗的・歸納的方法であると言えよう⁵⁰⁾。

しかしながら、ペティは、この方法のみで十全であると考へていたのではない。同じ「政治算術」の序文で、かれ

48) 高野岩三郎著「社會統計學史研究」(1942年)66ページ。

49) 引用は、すべて兩著にあるペティの序文による。

50) すでに述べたように、ペティはグラントの「諸觀察」(1662年)に刺激されてダブリン死亡表の研究に着手していたが、それは政治算術の方法を確立した頃完了し、ロンドン市の人口に關する研究と同じ年に出版された。それらは、*Observations upon the Dublin-Bills of Mortality*, 1681, and *the State of that City*. London, 1683; *Another Essay is Political Arithmetick concerning*

は言う、「まことに、これら（數・重量・尺度）を基礎としても、十二分には語りえない、ということを私は告白しなければならぬ。それは、ちょうどさいころの目のでかたを豫言できぬのと同じである。」數字が不正確であれば、「王權」によって、これを正しいものにすることもできるし、たとえ數字が「どうまちがっていても、私がねらいさだめている (aim at) その知識への道を示すべき諸々の假設 (Suppositions) としては十分なのである」と⁵¹⁾。この方法は經驗的・歸納的方法とはむしろ逆な、すくなくとも形式的には演えきの方法であって、かれをして“Body Politick”に關する一般的認識を「ねらいさだめ」しめるものはなにかが問題であろう。そしてこの二つの方法を、一體としてペティが定式化したところに、きわめて重大な意義があるように思われるのである。

2. 晩年—ランスダウン侯家

1670年代のおわり頃、ペティは、貴族に列してはどうかという交渉をうけた。そしてこの話の出所は、チャールズ2世の宮廷における新教徒の黨派であった。そこでかれは、爵位をえて樞密顧問官になろうとし、1680年の春にロンドンにおもむき、これを機會に公共の事業に力をつくそうとしたのである。しかしチャールズ2世は、新教徒を顧問官にすることを拒んだので、かれはむなしくアイアランドに歸った。そのとき、またしても、かれと徵稅うけおい人との論戦がはじまり、徵稅うけおい制度に對するかれの強硬な反對意見が注目をひいたので、1682年6月、かれはロンドンに召喚され、アイアランド税制の再編についての樞密院の討議に参加した。

このロンドン滞在中に、ペティは國印尙書ハリファックス侯 (Marquis of Halifax, Sir G. Savile 1633—95) の貨幣改鑄案に對する見解を問答體に述べた「貨幣小論」(Sir William Petty's *Quantulumcumque concerning Money*, 1682. London, 1695.) を書き、悪質の貨幣を鑄造して貨幣量を増加し、それによって國力を増大しようとするのがいかに不合理であるかを主張した。この書物は、かれの貨幣論であり、重商主義的思想を完全に脱却したものとされている。

1683年の夏、ペティは非常に失望してアイアランドに歸った。そして、ケリ州ケンメアの植民地に旅行したり、20年もまえに没頭した複底船の實驗をはじめたりして自分をなぐさめ、また、ロンドンの王立協會にならって、ダブリン理學協會 (Dublin Philosophical Society) を

the Growth of the City of London, 1682. London, 1683. である。

51) 註 49 におなじ。

創立するために、積極的に活動したのもこの頃であった。

1685年の2月、チャールズ2世は、死の床でローマ舊教を認容して死に、その弟ジェームズ2世 (James II.) が即位した。この報に接して、ペティは同年の夏ロンドンにいった。ジェームズ2世はヨーク公 (Duke of York) の時代からペティを知っており、かれに對して依然として好意を示した。そこでペティは、今度こそ思いどおりにアイアランドの行政改革をおこなう好機がきたとひそかに思った。かれは、税制改革案やアイアランド統計局設置案を國王に提出した。同時にかれは、かつて「政治算術」で論證した主題、すなわちイングランドが、すくなくとも潜在的には、富力・軍力の双方においてフランスに對抗しようという主題にたちもどった。そして國王の歡心を買うために、政治算術の方法にしたがい、ロンドンが世界最大の都市であることを立證する一連の小論やその他の論文を書いた⁵²⁾。

しかし、舊教徒のジェームズ2世やイングランド政府は、ペティの提案や主張をとりあげなかった。かれは、國王が發した「信教自由令」(Declaration of Liberty of Conscience I. 1687年4月)が、一實はローマ舊教徒を利するために發せられたのに、一自己の思想と完全に一致していると思ひこんでいたのである⁵³⁾。1687年の6月頃、ニュートン (Sir I. Newton 1642—1727) の「プリンキピア」(*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*. London, 1687.) が出版された。ペティはこの書物の卓絶した眞價をみとめ、この著作の眞價をみとめる人がすくないことをなげき、「著者に500ポンド、この書物の眞價を理解しているチャールズ (Charles—ペティの長子) に200ポンドを贈りたい」と言ったという⁵⁴⁾。

この頃、ペティは數ヵ月間健康がすぐれなかった。1687年11月30日、ひどい歩行困難をおして、かれは王立協會における聖アンドルー日 (St. Andrew's day) の年次正さん會に出席し、病をえて歸宅した。かれの足はえそ (gangrene) を起し、12月16日、ピカディリ (Piccadilly) の自宅で死んだ。かれの遺産は不動産のほか

52) これらは、*Further Observation upon the Dublin-Bills: or, Accompts of the Houses, Hearths, Baptisms, and Burials in that City*. London, 1686; *Two Essays in Poitical Arithmetick, concerning the People, Housing, Hospitals, &c. of London and Paris*. London, 1687; *Observations upon the Cities of London and Rome*. London, 1687; *Five Essays in Political Arithmetick*. London, 1687; *A Treatise of Ireland*, [1687.] である。

53) Fitzmaurice: *op. cit.*, pp. 234—243.

54) Fitzmaurice: *Ibid.*, p. 305.

15,000ポンドであったという。かれはラムゼーに葬られた。かれの死とちょうど前後して、アイアランドにおいては、ジェームズ2世に加担する舊教徒の反亂が起り、かれが経営していたケンメアの植民地も、襲撃・破壊されたのである。

そして、ペティの死の翌年には、かれの意見を取りあげなかったジェームズ2世もまた、イングランドを去り、コンヴェンション (Convention) は、一層平民的なウィリアム3世—メアリ (William III—Mary) を新國王として迎え、名譽革命が成就されたのである。

ペティには三人の遺子—チャールズ、ヘンリ、アン (Charles, Henry, Anne) —があった。チャールズとヘンリは、シェルバーン男 (Baron of Shelburne) の爵位を授けられ、長女アンの孫のウィリアム (W. Petty 1737—1805) は、曾祖父の遺産をうけつぎ、ウィッグ (Whig) 黨の名家ランズダウン侯 (Marquis of Lansdowne) 家の始祖となった。アイアランドにおけるペティの所有地は、今日にいたるまでその子孫によってうけつがれているという。

結論にかえて

ペティが「政治算術」および「アイアランドの政治的解剖」の兩著の執筆に着手したのは、1672年頃、すなわちかれの二度めのアイアランド滞在の時期であり、これらを完成し、かれの“Body Politick”の研究方法を定式化したのは、1676—77年頃、すなわちかれの三度めのアイアランド滞在の時期であった。そして年齢的には、49歳頃に着手し53—54歳頃これを完成したのである。

この兩著で確立された・ペティの前述の研究方法を要約すればつぎのようになるであろう。(1) 社會經濟現象を観察し、これを數・重量・尺度をもって計量し、これのみによって議論すること、(2) この計量結果が不備缺陷をもっておれば、王權をもって、一層正確なものにすることもできるが、それがどうまちがっていても、ねらいさだめた知識への道を示す假説としては、十分であること、(3) さらに、(1) および (2) の方法を用いて、“Body Politick”を解剖する、すなわち、その均整・構成組織・比例を明らかにすること、換言すれば“Body Politick”の内部構造、內的連關を明らかにすること、である。そしてかれは、この方法によってみちびきだされた結論は一國の「政治的醫藥」(Political Medicine) である、というのは、これらは「永遠の法と眞理の標準」(Eternal Laws and Measures of Truth) とにした

かうものであるからである⁵⁵⁾、と言っている。

ペティの生涯を、このように定式化された研究方法にかかわらしめながらふりかえって見るとき、もっとも重要な意義をもつ時代は、かれの生活の中心問題が“Body Natural”の研究から、“Body Politick”のそれへ轉回したその軸をなしている時代、すなわち共和國治下のアイアランドにおいて、かれが“Down Survey”と沒收地分配事業とを主宰した7ヵ年であろう。

アイアランド渡航以前の青年ペティを特徴づけるものは、ヴェサリウスの解剖學とベイコンの經驗科學論であろう。そして、かれが前者を學んだのは、「政治學を、傳統ではなく理性の基礎のうえにはじめてとりあつかった」⁵⁶⁾ホップズの弟子としてであり、後者を學んだのは、主としてロンドンやオックスフォードにおけるベイコンの學徒たち、すなわち「信念ではなくて理性を、傳統ではなくて探求」を合言葉とし、いっさいの現象を、「理性というテストにかけてトライしようとする」⁵⁷⁾科學的觀察者のサークルにおいてであった。

このような解剖學者であったペティが、共和國治下のアイアランドで“Down Survey”を主宰したとき、この測量が、近世における科學的測量の最初の試みとなり、かれの名を不朽ならしめたのは、むしろ當然であると言えるかもしれない。しかしながら、この測量は單に自然的な存在としての土地の物理的諸特徴を「幾何學的に」測定するものではなく、當時勞働とならんで“Body Politick”のもっとも基本的な構成要素の一つとしての土地の測量であった。

同時に、“Down Survey”は、沒收地を一定額の貨幣の對價として、將校・兵士・投機者等々、種々さまざまの階層の人々に分配する事業と直接に結びついた測量であった。しかも測量と土地分配の事業は、アイアランドにおける土地所有關係そのものが、11ヵ年間の反亂につづいて、征服・土地沒收・植民というもっとも露骨な植民政策のために、著るしく動搖し、近代的な土地所有關係が強力的に創出されつつあったその過程に、おこなわれたものであった。

これらの事業を主宰したペティは、土地の生産性はなにによってさだめられるか、分配の公平を期するためにはなにを基準とすべきか、等々の基本的な問題に當面したのであった。そして、このような問題を解こうとしたかれの眼前に展開される現實は、廢虚と化したアイアランドに乗りこんだイングランドの軍隊幹部や、政府要人や、投機者やのあいだの、贈收賄・詐偽・陰謀等々、總

56) Green: *op. cit.*, p. 614.

57) Green: *Ibid.*, pp. 608—609.

55) Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 158.

じて新植民地の建設にともなう腐敗した事実の累積であり、これらの背徳行爲によって、問題が事実上「解決」されてゆくという現実であった。

したがって、全體としての“Down Survey”一没收地分配事業は本来ペティにとっては、近代化しつつあるアイアランドという“Body Politick”を・anatomizeする事業であり、これをおこなうことなしに、この問題は解けなかったのである。

この事業は、まず第一に“Body Politick”の諸現象の數量的把握からはじめられた。それは土地およびその生産物の物理的・數量的把握であった。そして當時においては、土地もその生産物も、衣食住も、労働力も、貨幣によって表現され、租税もまた金納化されつつあった。すなわち、社會關係は、しだいに商品生産とその生産物の貨幣による賣買によって支配され、「富の増加は、君主の消費物の増加としてではなく、國民の、地主の、都市の、要するに市民社會の富の増加としてあらわれ」⁵⁸⁾ つつあったのである。別言すれば、社會經濟現象を自然科学的方法によって測定計量し、觀察・比較するということは、共通の尺度としての貨幣の存在によって、一應可能なものとなる基盤が形成されつつあったのである。

ペティの第一の方法は“Down Survey”と没收地分配事業とを通じて、この基盤のうねに形成されたと言えよう。そしてこの方法は、王政復古後、グラントの「諸觀察」によって著しく刺激され、一方ではダブリン死亡表に關する研究開始となり、他方では「租税および貢納論」や「賢者には一言をもって足る」、さらに進んで「政治算術」、「アイアランドの政治的解剖」における經濟現象の數量的關連の把握となり、かれが後代の人々から人口統計、經濟統計の始祖と呼ばれるに至ったことの根據となったものであった。

第二に、“Down Survey”一没收地分配事業の中心課題は、測量した没收地を一定額の貨幣の對價として、種々さまざまな階層の人々に分配することであった。前述のように、いっさいの現象を「理性というテストにかけてトライ」しようとするペティの中心問題は、その事業に公平を期することであり、そのためには、分配に關して、なんらかの合理的な基準を見いださなければならなかった。アイアランドの土地は、分配をうくべき者によってさまざまに評價され、その評價額に應じて分配されたのである。が、この評價は、すでに述べたような諸々の背徳的行爲によって、きわめて恣意的に決定され、いかに「幾何學的に」嚴密に面積を“Admeasure”しえて

も、地價という“Number”自體が、言わば恣意的に動揺するのであるから、分配の合理的基準は見いだされず、したがってその公平もまた期しがたいのである。

そこでかれは、この合理的基準を「自然のなかに」（「アイアランドの政治的解剖」第9章）、すなわち客觀的に妥當するものによって示そうとする。そしてこの問題を解いてゆくと、自分は「政治經濟學におけるもっとも重要な問題、すなわち、あらゆる物の價値を（土地と労働の兩者のうちの—譯者）いずれか一方のもののみによって表現するために、どのようにして土地と労働とのあいだに同價・均等の關係(Par and Equation)をつくりあげるかという問題」に到達すると言っている（同上第9章）。そしてかれは、土地の價値を労働に還元し、労働をあらゆる物の價値の標準であるとしたのである。あらゆる物は、土地と労働との所産であるから、土地と労働とのあいだに、自然的同價(natural Par)を見だし、ペンスをポンドに整約するように、兩者のうちの一つをあらゆるものの價値の標準たらしめる、ということは、すでに「租税および貢納論」第4章において示されている。それは、かれが租税負擔の公平を期するために、地代の「不可思議な性質」(mysterious nature)を解いてえたものであり、労働價値説の創設者として、かれを不朽たらしめるものであった。しかし、「アイアランドの政治的解剖」の第9章は、“Down Survey”と没收地分配事業の沿革が、したがってかれの生活體驗そのものが、如實に示されているだけに、一層興味深いのである。

このような一般的な認識に到達するのは、すなわちかれのことばをもってすれば、一定の「知識をねらいさだめる」ということは、どのようなことであろうか。それが推理の結果えられるものであることは明らかであろう。ペティのほぼ同時代者で、重商主義者と呼ばれるデヴィナント(C. D'avenant 1656—1714)は言う、「政治算術とは、統治に關連する諸事項について、數字をもって推理する術(reasoning)である」と⁵⁹⁾。またホップズは、推理を定義し、「われわれの思考を記號づけ(marking)あらわす(signifying)ために協定された、一般の諸名辭の、連續の計算(すなわち加減)にほかならぬ」と言う⁶⁰⁾。このかぎりにおいて、ペティがおこなった推理は、推算ないしは推計であろう。そしてかれは、著作のいたるところでこれをおこなっており、それ自體きわめて興

59) D'avenant, C: *The Political and Commercial Works of that celebrated Writer Charles D'avenant, LL. D.*... London, 1771. vol. I. p. 128.

60) 水田洋譯「リヴァイアサン」(I) (1949年) 99ページ。

58) 大内兵衛 前掲邦譯書 93 ページ。

味深い問題をもっているのである。

しかしながら、ペティが到達した一般的認識は、すべて数字の加減乗除のみによってえられたものではない。前述したように、かれが「政治経済学のもっとも重要な問題」として、あらゆる物の価値を労働に還元しようとしたとき、それは推計の結果えられたものではなかった。しかもかれは、それをもって客観的に妥當する基準としたのである。そうであるとすれば、この一般的認識なるものは、客観的に存在するアイアランドという“Body Politick”の内的連關の基礎にあるもの、すなわち本質的なものの認識でなければならず、それに到達するには、諸現象を忠實に観察して本質的なものを見いださねばならない。

若き日の著作「教育論」(*Tractate on Education*)のなかで、ペティは、「観察と実験が唯一の眞實の方法である」と言っているが、かれは「アイアランドにおいて、みずから吟味するあらゆるもののうちで、なにが本質的で、なにが本質的でないかを辨別できるまでに自己の観察力を鍛えた」という⁶¹⁾。そして當時のアイアランドは、ペティの表現によれば、「実験のための一枚の白紙」⁶²⁾のごとき状態であり、前述のように廢虚と化した國土のうえに、資本主義的諸關係が強力的に創出されようとしていたのである。その中軸となったものは“Down Survey”と沒收地分配事業そのものであった。それを主宰

したかれは、おそらくはそこで、端初的な資本主義的經濟社會の内的連關を見きわめたに相違ない。これこそ、かれの言うところの「知識をねらいさだめる」ことであり、一般的認識の獲得の過程ではなかろうか。そしてかれは、このようにしてえたものを立證する假説として数字を用いるのであって、その實例もまた、かれの著作のいたるところに示されているのである。

しかもペティは、以上二つの方法を切りはなして用いたのではけっしてなく、測量と土地分配の兩事業が密接な關連をもっていたように、この二つの方法は、一體として、かれの方法そのものを形成していたのである。そしてかれが、“Body Politick”の解剖學者、近世經濟學の礎石をおいた人として眞に偉大であるとするれば、それはおそらくこの點に存するのではなかろうか。しかし、かれの生涯と時代のなかからこれを論證することは、現在の私には、これ以上には解きえない問題である。今後私は、ペティの生涯と時代についての理解をさらに深めるとともに、かれの著作を中心として、この問題を見きわめる、という努力をつづけようと思うのである。(1950. 10. 25.)

61) Bevan: *op. cit.*, p. 86.

62) Fitzmaurice: *op. cit.*, p. 188.